英文解釈 L01 第 10 講 that 節を文の中の内容として読む

学習目標

- that 節全体の範囲を確定し、主節の S・O・C のどの位置で働いているかを説明できる。
- 主節と that 節内部の主語・述語をそれぞれ特定し、両者を取り違えずに英文全体を訳せる。
- think・know などの基本動詞の目的語で that が省かれた短い内容節を見つけ、一まとまりの O として読める。

凡例：S＝主語、V＝述語動詞、O＝目的語、C＝補語、M＝修飾語。外側 view は主節の骨格と内容節全体の役割を示し、内部 view は内容節の中の構造を示す。名詞の働きをするまとまりは〈〉、形容詞の働きをするまとまりは〔〕、副詞の働きをするまとまりは( )で表す。V には下線を引く。

内容節を目的語の位置へ戻す

英文の途中に that が現れると、その後ろにも主語と動詞が続くため、文の中心がどこにあるのか見失いやすい。しかし、that 節が名詞の働きをしている場合は、節全体を一つの「内容」として捉えることができる。大切なのは、that 以下だけを先に訳すのではなく、まず外側の主節から文の骨格をつかむことだ。

考えている内容を目的語として読む

語注：school library「学校の図書館」／need more chairs「椅子がもっと必要である」／during the lunch break「昼休みの間」

〈Our teacher〉 thinks
S V

〈that the school library needs more chairs for students during the lunch break〉.
O

S “Our teacher” / 主節の主語
V “thinks” / 考えている
O “that the school library needs more chairs for students during the lunch break” / 考えている内容 / that から break までが thinks の目的語。先生の考えを述べている。

Our teacher thinks 〈that 〈the school library〉 needs
S V

〈〈more chairs〉 〔for 〈students〉〕〉 (during 〈the lunch break〉)〉.
O M

S “the school library” / 内容節の主語 / needs の主語。主節の Our teacher とは区別する。
V “needs” / 必要としている
O “more chairs for students” / 必要なもの / for students は chairs を説明し、生徒用の椅子を表す。
M “during the lunch break” / 時 / 昼休みの間という時期を示す。

意味：私たちの先生は、昼休みには学校の図書館に生徒用の椅子がもっと必要だと考えている。

読み方

まず主節を見ると、主語（S）は Our teacher、動詞（V）は thinks だ。think は「〜と考える」という意味なので、続いて「先生は何を考えているのか」を確かめる。その答えに当たるのが、that から文末の break までの内容節全体であり、これが thinks の目的語（O）になる。

一方、that 節の内部には、the school library という主語と needs という述語動詞がある。内容節内の needs の主語は the school library であり、主節の主語である Our teacher とは区別する。また、文全体が直接「椅子が必要だ」と断定しているのではなく、先生がそう考えていることを伝えている。主節の判断と、その判断の中身を区別して訳すことが重要だ。

知っている内容の範囲を確かめる

語注：museum guide「博物館の案内係」／main entrance「正面入口」／close「(入口などが)閉まる」／on weekdays「平日に」／during the winter「冬の間」

〈The museum guide〉 knows
S V

〈that the main entrance closes at five on weekdays during the winter〉.
O

S “The museum guide” / 主節の主語
V “knows” / 知っている
O “that the main entrance closes at five on weekdays during the winter” / 知っている内容 / that から winter までが knows の目的語。案内係の認識内容を表す。

The museum guide knows 〈that 〈the main entrance〉 closes (at five) (on weekdays)
S V M M

(during 〈the winter〉)〉.
M

S “the main entrance” / 内容節の主語 / closes の主語は正面入口。
V “closes” / 閉まる / 現在形で通常の閉まる時刻を述べている。
M “at five” / 時刻 / 5 時に。
M “on weekdays” / 曜日 / 平日に。
M “during the winter” / 時期 / 冬の間。内容節は winter まで続く。

意味：その博物館の案内係は、冬の間の平日には正面入口が 5 時に閉まることを知っている。

読み方

この英文では、The museum guide が主節の主語（S）、knows が動詞（V）になる。know は「〜を知っている」という意味なので、目的語（O）には「何を知っているのか」という内容が入る。それが that から文末の winter までの内容節全体だ。

内容節の内部では、the main entrance が主語、closes が述語動詞になっている。さらに、at five は閉まる時刻、on weekdays は曜日、during the winter は時期を示しており、いずれも入口が閉まるという内容に含まれる。したがって、closes の直後で that 節を終わらせず、winter までを一まとまりとして読む必要がある。

最初の英文では thinks が「先生の考え」を表し、次の英文では knows が「案内係が知っていること」を表している。どちらも that 節が O になる構造は同じだが、主節の動詞によって、内容全体がどのように述べられているかは異なる。**外側の主語と動詞を確かめる → that 節の終わりを見つける → 内容節全体を O として戻す**という順序を守れば、節の内部と外部の関係を崩さずに読み取れる。

主語と補語の内容節を見分ける

that 節は、目的語（O）だけでなく、主語（S）や補語（C）としても働く。どの役割になるかは、that の直後の単語だけでは決まらない。that から始まる内容節全体を捉え、外側の文のどこに当てはまるかを確かめることが大切だ。

文頭の that 節を主語として読む

語注：public library「公立図書館」／surprise「〜を驚かせる」／resident「住民」

〈That the public library opens at seven every morning〉 surprises
S V

〈〈many residents〉 〔in 〈this small town〉〕〉.
O

S “That the public library opens at seven every morning” / 主節の主語 / that 節全体が主語。every morning で節が終わる。
V “surprises” / 驚かせている
O “many residents in this small town” / 驚いている人々 / in this small town は住民を説明する。

〈That 〈the public library〉 opens (at seven) (every morning)〉 surprises many residents in this small town.
S V M M

S “the public library” / 内容節の主語 / opens の主語。that 自体は主語ではない。
V “opens” / 開く
M “at seven” / 時刻 / 7 時に。
M “every morning” / 頻度 / 毎朝。主節の surprises はこの後に続く。

意味：公立図書館が毎朝 7 時に開くことは、この小さな町の多くの住民を驚かせている。

読み方

文頭の That から読むと、the public library という主語と opens という動詞が現れる。しかし、the public library を文全体の主語として捉えると、後ろの surprises がどこにつながるのか分からなくなる。ここでは、まず that から every morning までを一つの内容節として区切る。

この内容節の内部では、the public library が主語、opens が述語動詞だ。一方、外側の文では、that 節全体が主語（S）となり、surprises が述語動詞（V）、many residents in this small town が目的語（O）になる。つまり、住民を驚かせているのは「公立図書館が毎朝 7 時に開くこと」だ。

文頭に内容節がある場合は、その内部で主語と動詞を見つけても、そこで文全体の骨格が完成したとは考えない。**that 節の終わりを確認してから、外側の述語動詞へ戻る**ことで、二組の主語と述語を区別できる。

解説

be 動詞の後ろの that 節を補語として読む

語注：main problem「主な問題」／arrive late「遅れて到着する」／during the winter months「冬の間」

〈The main problem〉 is
S V

〈that our school bus often arrives late during the winter months〉.
C

S “The main problem” / 主節の主語 / 主な問題。
V “is” / be 動詞
C “that our school bus often arrives late during the winter months” / 問題の具体的内容 / that 節全体が主語の内容を説明する補語。

The main problem is 〈that 〈our school bus〉 often arrives late
S M V M

(during 〈the winter months〉)〉.
M

S “our school bus” / 内容節の主語 / 遅れて到着するのはスクールバス。
M “often” / 頻度 / しばしば。
V “arrives” / 到着する
M “late” / 到着の遅さ / late は arrives を説明し、遅れて到着することを表す。
M “during the winter months” / 時期 / 冬の間。内容節は months まで続く。

意味：主な問題は、冬の間、私たちのスクールバスがしばしば遅れて到着することだ。

読み方

まず外側の文を見ると、The main problem が主語（S）、is が動詞（V）になっている。be 動詞の後ろには主語の内容を説明する部分が続くため、ここでは「主な問題とは何か」を確かめながら読む。

その答えが、that から文末の months までの内容節だ。節の内部では our school bus が主語、arrives が述語動詞で、often は頻度、late は到着の遅さ、during the winter months は時期を表している。これらを含む that 節全体が、主語 The main problem の内容を説明する補語（C）になっている。

ここで our school bus だけを補語として取り出すと、「主な問題は私たちのスクールバスだ」という別の意味になってしまう。実際に問題として述べられているのは、冬の間にそのバスがしばしば遅れて到着することだ。**内容節の内部にある名詞ではなく、内容節全体が C を占めている**と捉える必要がある。

前の節では that 節が think や know の目的語（O）になった。今回は、文頭で外側の述語につながれば主語（S）、be 動詞の後ろで外側の主語の内容を説明すれば補語（C）になることを確認した。同じ that 節でも、外側の文との関係を確かめることで、その役割を判断できる。

that がない目的語内容節を読む

that 節が目的語（O）になる英文では、that が書かれていないこともある。think や know などの基本動詞の後ろでは、that がなくても、主語と述語を持つ内容節が続く場合がある。まずは、that がある形とない形を比べてみよう。

that が明示された英文

語注：arrive「到着する」／this evening「今日の夕方、今晩」

〈Anna〉 thinks 〈that the train will arrive at six this evening〉.
S V O

S “Anna” / 主節の主語
V “thinks” / 思っている
O “that the train will arrive at six this evening” / 考えている内容 / that から evening までが目的語。到着はアンナの予想であり、確定した事実とは述べていない。

Anna thinks 〈that 〈the train〉 will arrive (at six) (this evening)〉.
S V M M

S “the train” / 内容節の主語 / 到着するのは the train。that 自体は主語ではない。
V “will arrive” / 到着するだろう / will arrive は未来の到着を表す述語。
M “at six” / 時刻 / 6 時に。
M “this evening” / 時期 / 今日の夕方。内容節は evening まで続く。

意味：アンナは、その電車が今日の夕方 6 時に到着すると思っている。

読み方

外側の主節では、Anna が主語（S）、thinks が動詞（V）になる。thinks の後ろにある that から文末の evening までが、アンナの考えている内容を表す節だ。この内容節全体が、thinks の目的語（O）になっている。

内容節の内部では、the train が主語、will arrive が述語動詞になる。at six this evening は到着する時刻を表し、これもアンナが考えている内容に含まれる。文全体はアンナの考えを述べており、電車が実際に 6 時に到着することまで確定しているわけではない。

that が省かれた英文

語注：arrive「到着する」／this evening「今日の夕方、今晩」

〈Anna〉 thinks 〈the train will arrive at six this evening〉.
S V O

S “Anna” / 主節の主語
V “thinks” / 思っている
O “the train will arrive at six this evening” / 考えている内容 / that は原文にない。the train から evening までが内容節全体で、thinks の目的語になる。

Anna thinks 〈〈the train〉 will arrive (at six) (this evening)〉.
S V M M

S “the train” / 内容節の主語 / the train は will arrive の主語。単独で thinks の目的語になるのではない。
V “will arrive” / 到着するだろう / will arrive は未来の到着を表す。原文は到着の実現を保証せず、確定した事実としても述べていない。
M “at six” / 時刻 / 6 時に。
M “this evening” / 時期 / 今日の夕方。内容節は evening まで続く。

意味：アンナは、その電車が今日の夕方 6 時に到着すると思っている。

読み方

今度は thinks の直後に the train が現れる。ここで the train だけを thinks の目的語と決めてしまうと、その後ろの will arrive がどの主語につながるのか説明できなくなる。

まず、Anna と thinks で外側の主語・述語を確かめる。続く the train と will arrive は、内容節の内部にある別の主語・述語の組だ。the train から文末の evening までが「その電車が今日の夕方 6 時に到着する」という内容を表し、そのまとまり全体が thinks の目的語（O）になる。

つまり、that が省かれても、主節と内容節の二つの構造は変わらない。that を補って考えれば最初の英文と対応づけられるが、実際の二つ目の英文には that という語は存在しない。英文に書かれている the train から内容節が始まると判断する。

二組の主語・述語をどう見分けるか 今回のように、think や know などの基本動詞の後ろに新たな主語と述語が続く場合、その部分が動詞の目的語となる内容節かどうかを確かめる。that が見えなくても、節の内部には主語と述語が残っているため、語順と動詞の働きからまとまりを捉えられる。

読み進めるときは、**外側の主語・述語を確定する → 動詞の後ろに続く内容節の主語・述語を見つける → 内容節の終わりまでを一まとまりにして外側の O へ戻す**という順序を意識しよう。

今回の二つの英文は、that の有無が異なっても、アンナが何を考えているかという内容は同じだ。目的語を一つの名詞だけで探すのではなく、主語と述語を含む節全体が目的語になる場合を見抜くことが、正確な英文解釈につながる。

©ミライコーチング

主節の判断と内容節の情報を訳し分ける

that 節の範囲と役割が分かっても、主節の動詞の意味を見落とすと、英文全体の意味が変わってしまう。内容節は「何について述べているか」を示し、主節の動詞は「その内容をどのように捉えているか」を示す。二つの働きを区別してから日本語にまとめよう。

予想している内容を読む

語注：expect that ...「…だと予想する、…だろうと思う」／next game「次の試合」／against ...「…を相手に、…と対戦して」／city team「市のチーム」

〈The coach〉 expects
S V

〈that the players will win their next game against the city team on Saturday〉.
O

S “The coach” / 主節の主語
V “expects” / 予想している
O “that the players will win their next game against the city team on Saturday” / 予想している内容 / that から Saturday までが目的語。勝利はコーチの予想内容であり、原文は勝利を確定した結果として述べていない。

The coach expects 〈that 〈the players〉 will win
S V

〈〈their next game〉 〔against 〈the city team〉〕〉 (on Saturday)〉.
O M

S “the players” / 内容節の主語 / 勝つと予想されているのは選手たち。
V “will win” / 勝つだろう / will win は未来の勝利を表す。主節の expects によって予想内容になる。
O “their next game against the city team” / 勝つ対象の試合 / against the city team は next game を説明し、市のチームとの次の試合を表す。
M “on Saturday” / 試合の時 / 土曜日に。内容節は Saturday まで続く。

意味：コーチは、選手たちが土曜日に市のチームとの次の試合に勝つと予想している。

読み方

まず外側の骨格を確認すると、The coach が主語（S）、expects が動詞（V）になる。expects は「〜と予想する」という意味なので、何を予想しているのかを表す内容が後ろに続く。that から文末の Saturday までが内容節全体であり、expects の目的語（O）になっている。

内容節の内部では、the players が主語、will win が述語動詞だ。選手たちが土曜日の試合に勝つという未来の内容を、コーチが予想していることが分かる。ただし、主節の expects を無視して「選手たちは試合に勝つ」とだけ訳すと、予想を実際の結果のように伝えてしまう。英文全体では、勝利そのものではなく、勝利についてのコーチの予想が述べられている。

解説

過去の出来事を覚えていると読む

語注：remember that ...「…ということを覚えている」／lose a game「試合に負ける」／close game「接戦」／last winter「昨年の冬」

〈The coach〉 remembers
S V

〈that the players lost a close game against the city team last winter〉.
O

S “The coach” / 主節の主語
V “remembers” / 覚えている
O “that the players lost a close game against the city team last winter” / 覚えている内容 / that から winter までが目的語。過去の試合結果についての記憶を表す。

The coach remembers 〈that 〈the players〉 lost
S V

〈〈a close game〉 〔against 〈the city team〉〕〉 (last winter)〉.
O M

S “the players” / 内容節の主語 / 試合に負けたのは選手たち。
V “lost” / 負けた / lost は lose の過去形。過去の試合結果を表す。
O “a close game against the city team” / 負けた試合 / close game は接戦。against the city team は試合の対戦相手を示す。
M “last winter” / 試合の時期 / 昨年の冬。内容節は winter まで続く。

意味：コーチは、選手たちが昨年の冬に市のチームとの接戦に敗れたことを覚えている。

読み方

この英文でも、外側の主語（S）は The coach だが、動詞（V）は remembers になっている。that から文末の winter までが、コーチの覚えている内容を表す節であり、全体で remembers の目的語（O）を占める。

内容節の内部では、the players が主語、lost が述語動詞だ。lost は lose の過去形なので、内容節は昨年の冬の試合について述べている。主節の remembers は、その過去の出来事をコーチが覚えているという認識を表すため、未来についての予想を述べた最初の英文とは意味が異なる。

二つの英文は、どちらも that 節全体が O になる点では同じだ。しかし、expects は未来についての予想を表し、remembers は過去の出来事についての記憶を表している。**外側の動詞の意味を確かめ、内容節が伝える情報と結び付ける**ことで、誰が何をどのように捉えているのかを、過不足なく訳せる。

1

語注：bakery「パン屋」／open「（店が）開店する」／next Monday「来週の月曜日」

The neighbors think the new bakery will open next Monday.

設問

a. think の直後の the new bakery から始まる内容節について、外側の文での役割（S・O・C）と、その節が終わる語句を示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

例題 1 の解説

a. 内容節の役割と終端

- 外側での役割：目的語（O）
- 内容節の範囲：the new bakery から next Monday まで
- 内容節の終端：next Monday

まず外側の骨格を確認すると、The neighbors が主語（S）、think が動詞（V）になる。think は「〜と思う、〜と考える」という意味なので、その後ろに何を考えているのかを表す内容が続く。

think の直後には the new bakery という名詞のまとまりがある。しかし、これだけを目的語と判断してはいけない。後ろには will open という述語動詞が続いており、the new bakery を主語とする別の節が成立している。

この内容節の内部では、the new bakery が主語、will open が述語動詞になる。next Monday は開店する時期を表すため、内容節はその語句まで続く。したがって、the new bakery だけではなく、the new bakery will open next Monday という内容節全体が、外側の think の目的語（O）になる。

この英文には that が書かれていないが、主節と内容節のそれぞれに主語と述語がある。二組の主語・述語を区別し、内容節の終わりまでを一まとまりとして捉えれば、that がなくても外側の骨格との関係を読み取れる。

〈The neighbors〉 think 〈the new bakery will open next Monday〉.
S V O

S “The neighbors” / 主節の主語
V “think” / 思っている
O “the new bakery will open next Monday” / 考えている内容 / the new bakery から Monday までが目的語。that は原文にない。開店は近所の人たちの考えとして述べられており、原文はその実現を保証せず、確定した事実としても述べていない。

The neighbors think 〈〈the new bakery〉 will open (next Monday)〉.
S V M

S “the new bakery” / 内容節の主語 / 開店するのは新しいパン屋。the new bakery だけが think の目的語になるのではない。
V “will open” / 開店するだろう / will open は未来の開店を表す述語。
M “next Monday” / 開店の時期 / 来週の月曜日。内容節は Monday まで続く。

b. 全文和訳

直訳 近所の人たちは、新しいパン屋が来週の月曜日に開店すると思っている。

満点の訳 近所の人たちは、新しいパン屋は来週月曜日に開店すると考えている。

どちらの訳も、内容節が表す「新しいパン屋が来週月曜日に開店する」という内容を、外側の think につなげている。

ここで重要なのは、開店するという内容を、近所の人たちが考えていることとして訳す点だ。英文は開店についての近所の人たちの考えを述べており、実際にその日に開店することまで確定しているわけではない。

2

語注：science club「科学部」／win first prize「一等賞を獲得する」／contest「大会、コンテスト」／even「〜さえ」／own「自身の」

That the science club won first prize in the contest surprised even its own members.

設問

a. 文頭の That から始まる内容節について、外側の文での役割（S・O・C）と、その節が終わる語句を示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

例題 2 の解説

a. 内容節の役割と終端

- 外側での役割：主語（S）
- 内容節の範囲：That から contest まで
- 内容節の終端：in the contest

〈That the science club won first prize in the contest〉 surprised
S V

〈even 〈its own members〉〉.
O

S “That the science club won first prize in the contest” / 主節の主語 / That から contest までの内容節全体が主語。that 自体が主語なのではない。
V “surprised” / 驚かせた / surprised は外側の述語動詞。過去の驚きを表す。
O “even its own members” / 驚いた人々 / 科学部の部員たち自身。even は部員たちさえ驚いたことを強調する。

〈That 〈the science club〉 won 〈first prize〉 (in 〈the contest〉)〉 surprised even its own members.
S V O M

S “the science club” / 内容節の主語 / 一等賞を獲得したのは科学部。主節全体の主語とは区別する。
V “won” / 獲得した / won は win の過去形。
O “first prize” / 獲得したもの / first prize は一等賞。
M “in the contest” / 大会 / その大会で。内容節は contest まで続き、直後の surprised から主節の述語になる。

文頭の That に続いて、the science club という主語と won という述語動詞が現れる。ここで the science club を文全体の主語と決めてしまうと、後ろの surprised との関係を正しく捉えられない。

まず、that 節の内部を確認する。the science club が主語、won が述語動詞であり、first prize は獲得したもの、in the contest はその大会での出来事であることを示している。したがって、that 節は contest まで続き、「科学部がその大会で一等賞を獲得したこと」という内容を表す。

内容節の終わりを確認すると、その直後に surprised という動詞が現れる。これが外側の主節の述語動詞（V）であり、even its own members が目的語（O）になる。surprise は「〜を驚かせる」という意味なので、何が部員たちを驚かせたのかを考えると、that 節全体が主語（S）になっていることが分かる。

つまり、外側の文の骨格は「科学部が一等賞を獲得したことが、部員たち自身さえ驚かせた」という関係だ。内容節内部の the science club だけを外側の主語として取り出すのではなく、**that 節全体を主語として捉え、その終端から外側の述語動詞 surprised へ戻る**ことが重要だ。

b. 全文和訳

直訳 科学部がその大会で一等賞を獲得したことは、その部のメンバー自身さえ驚かせた。

満点の訳 科学部がその大会で一等賞を取ったことには、部員たち自身さえ驚いた。

直訳では、that 節全体を主語、surprised を「驚かせた」として、英文の構造をそのまま反映している。一方、満点の訳では「部員たち自身さえ驚いた」と表現を整えているが、驚きの対象となった出来事と、驚いた人の関係は変わらない。

また、even its own members の even は「〜さえ」という意味を加えている。単に「部員たちが驚いた」とするのではなく、「部員たち自身さえ驚いた」と訳すことで、原文の強調を保てる。

この英文では、that 節内部の won が一等賞を獲得した出来事を表し、外側の surprised がその出来事に対する驚きを表している。二つの述語動詞の働きを分けて読むことで、出来事とそれに対する反応を混同せずに訳せる。

演習問題

1

語注：notice「〜に気づく」／several「数人の」／practice「練習する」／after school「放課後に」

The music teacher noticed that several students practiced quietly in the empty classroom after school.

設問

a. that から始まる内容節について、外側の文での役割（S・O・C）と、その節が終わる語句を示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

2

語注：favorite store「お気に入りの店」／close early「早く閉店する」／on Sundays「日曜日には」

Mika knows her favorite store closes early on Sundays.

設問

a. knows の直後の her favorite store から始まる内容節について、外側の文での役割（S・O・C）と、その節が終わる語句を示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

3

語注：town library「町の図書館」／offer「〜を提供する」／art class「美術教室」／welcome news「うれしい知らせ」

That the town library offers free art classes every Saturday is welcome news for many families.

設問

a. 文頭の That から始まる内容節について、外側の文での役割（S・O・C）と、その節が終わる語句を示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

4

語注：rise「（水位などが）上がる」／heavy rain「大雨」／concern「〜を心配させる」／nearby「近くの」

That the river rises quickly after heavy rain concerns farmers in the nearby village.

設問

a. 文頭の That から始まる内容節について、外側の文での役割（S・O・C）と、その節が終わる語句を示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

5

語注：biggest hope「最大の願い」／community center「地域の交流施設」／reopen「再開する、再び開く」／winter holidays「冬休み」

Our biggest hope is that the community center will reopen before the winter holidays.

設問

a. is の直後の that から始まる内容節について、外側の文での役割（S・O・C）と、その節が終わる語句を示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

©ミライコーチング

6

語注：surprising result「驚くような結果」／smaller team「より小規模なチーム」／final match「決勝戦」／by three points「3 点差で」

The surprising result was that the smaller team won the final match by three points.

設問

a. was の直後の that から始まる内容節について、外側の文での役割（S・O・C）と、その節が終わる語句を示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

演習問題の解答・解説

1

a. 内容節の役割と終端

- 外側での役割：目的語（O）
- 内容節の範囲：that から after school まで
- 内容節の終端：after school

まず外側の骨格を確認すると、The music teacher が主語（S）、noticed が動詞（V）になる。notice は「〜に気づく」という意味なので、後ろには先生が何に気づいたのかを表す内容が続く。

that の後ろでは、several students が主語、practiced が述語動詞になっている。several students だけを外側の目的語と捉えるのではなく、生徒たちが何をしていたのかを表す部分まで読み進める必要がある。

ここでは、quietly が練習の様子、in the empty classroom が場所、after school が練習した時を表していると読む。したがって、内容節は after school まで続き、that several students practiced quietly in the empty classroom after school というまとまり全体が noticed の目的語（O）になる。

なお、文脈によっては after school が外側の noticed を説明する読みも可能で、その場合は内容節が classroom で終わる。ここでは、放課後に生徒たちが練習していたという読みを採用する。

〈The music teacher〉 noticed
S V

〈that several students practiced quietly in the empty classroom after school〉.
O

S “The music teacher” / 主節の主語
V “noticed” / 気づいた
O “that several students practiced quietly in the empty classroom after school” / 気づいた内容 / 採用読みでは that から after school までが目的語。放課後に練習していたことに気づいた。

The music teacher noticed 〈that 〈several students〉 practiced quietly
S V M

(in 〈the empty classroom〉) (after school)〉.
M M

S “several students” / 内容節の主語 / 練習していたのは数人の生徒。
V “practiced” / 練習していた / practiced は過去形。
M “quietly” / 練習の様子 / 静かに。
M “in the empty classroom” / 練習した場所 / 空き教室で。
M “after school” / 練習した時 / 採用読みでは練習が放課後。noticed を修飾する別読みでは、内容節は classroom で終わる。

b. 全文和訳

直訳 音楽の先生は、数人の生徒が空き教室で放課後に静かに練習していたことに気づいた。

満点の訳 音楽の先生は、放課後、数人の生徒が空き教室で静かに練習していたのに気づいた。

どちらの訳も、that 節内部の「生徒たちが練習していた」という過去の出来事を、主節の noticed につなげている。満点の訳では、放課後という時の情報を前に移し、日本語として読みやすく整えた。

注意したいのは、練習していたのが several students であり、それに気づいたのが The music teacher だという関係だ。主節と内容節の主語を区別することで、生徒たちと先生の役割を取り違えずに訳せる。

2

a. 内容節の役割と終端

- 外側での役割：目的語（O）
- 内容節の範囲：her favorite store から on Sundays まで
- 内容節の終端：on Sundays

まず外側の文を見ると、Mika が主語（S）、knows が動詞（V）になっている。know は「〜を知っている」という意味なので、後ろにはミカが知っている内容が続く。

knows の直後には her favorite store という名詞のまとまりがある。しかし、そこだけを目的語と決めてしまうと、後ろの closes という動詞を正しく説明できない。

内容節の内部では、her favorite store が主語、closes が述語動詞になっている。early は閉店する時刻が早いことを表し、on Sundays は日曜日という曜日を示している。どちらも店が閉まるという内容につながるため、内容節は on Sundays まで続く。

したがって、her favorite store closes early on Sundays という内容節全体が、外側の knows の目的語（O）になる。

この英文には that が書かれていないが、Mika と knows、her favorite store と closes という二組の主語・述語がある。**knows の後ろに続く主語・述語を見つけ、内容節の終わりまでを一まとまりにする**ことで、that がなくても目的語の範囲を判断できる。

Mika knows 〈her favorite store closes early on Sundays〉.
S V O

S “Mika” / 主節の主語
V “knows” / 知っている / knows は現在の認識を表す。
O “her favorite store closes early on Sundays” / 知っている内容 / that は原文にない。her favorite store から Sundays までが目的語。

Mika knows 〈〈her favorite store〉 closes early (on Sundays)〉.
S V M M

S “her favorite store” / 内容節の主語 / 採用読みでは her はミカを指す。別の女性を指す可能性もある。
V “closes” / 閉店する / closes は現在形。通常の営業時間を表す。
M “early” / 閉店時刻の早さ / 早く閉まる。
M “on Sundays” / 曜日 / 日曜日には。内容節は Sundays まで続く。

b. 全文和訳

直訳 ミカは、彼女のお気に入りの店が日曜日には早く閉店することを知っている。

満点の訳 ミカは、お気に入りの店が日曜日は早く閉まることを知っている。

ここでは her をミカ自身を指すものとして訳している。ただし、文脈によっては別の女性を指す可能性もあり、文法上必ずミカ自身を指すと決まるわけではない。

主節の knows は現在形で、ミカがその内容を知っているという現在の認識を表している。一方、内容節の closes early on Sundays も現在形で、日曜日には早く閉店するという店の通常の営業時間を表している。

したがって、単に「店が日曜日には早く閉まる」と訳すだけでは、ミカがそのことを知っているという主節の意味が抜け落ちる。**店についての情報と、それを知っているミカの認識を結び付ける**ことで、英文全体の意味を正確に表せる。

3

a. 内容節の役割と終端

- 外側での役割：主語（S）
- 内容節の範囲：文頭の That から every Saturday まで
- 内容節の終端：every Saturday

まず文頭の That に続く部分を確認すると、the town library が主語、offers が述語動詞になっている。offers は「〜を提供する」という意味で、free art classes が提供されるもの、every Saturday がその曜日・頻度を表している。

ここで the town library だけを文全体の主語と考えてはいけない。図書館が何を提供しているかという内容が every Saturday まで続いており、その直後に is という動詞が現れる。この is が外側の主節の述語動詞（V）になる。

外側の文では、that 節全体が主語（S）、is が動詞（V）、welcome news for many families が補語（C）になっている。つまり、「町の図書館が毎週土曜日に無料の美術教室を提供していること」が「多くの家庭にとってうれしい知らせだ」という関係だ。

文頭の that 節を一まとまりとして捉え、その終端の every Saturday から外側の is へ戻ることで、内容節内部の主語と文全体の主語を取り違えずに読める。

〈That the town library offers free art classes every Saturday〉 is
S V

〈〈welcome news〉 〔for 〈many families〉〕〉.
C

S “That the town library offers free art classes every Saturday” / 主節の主語 / That から every Saturday までの内容節全体が主語。
V “is” / be 動詞 / is は主語の内容と補語を結ぶ。
C “welcome news for many families” / うれしい知らせ / 多くの家庭にとってうれしい知らせであることを表す。

〈That 〈the town library〉 offers 〈free 〈art classes〉〉 (every Saturday)〉 is welcome
S V O M

news for many families.

S “the town library” / 内容節の主語 / 提供しているのは町の図書館。That 自体は主語ではない。
V “offers” / 提供している / offers は現在形。
O “free art classes” / 提供するもの / 無料の美術教室。
M “every Saturday” / 曜日と頻度 / 毎週土曜日。内容節は Saturday まで続き、直後の is から外側の述語になる。

b. 全文和訳

直訳 町の図書館が毎週土曜日に無料の美術教室を提供していることは、多くの家庭にとってうれしい知らせだ。

満点の訳 町の図書館が毎週土曜日に無料で美術教室を開いているのは、多くの家庭にとって喜ばしい知らせだ。

どちらの訳も、that 節全体が主語となり、その内容を welcome news と述べている関係を保っている。

内容節内部の offers は現在形で、図書館が毎週土曜日に美術教室を提供していることを表す。一方、外側の is は、その内容が多くの家庭にとってうれしい知らせであることを示している。

ここで注意したいのは、図書館そのものが welcome news なのではなく、**図書館が無料の美術教室を毎週土曜日に提供しているという内容が、うれしい知らせになっている**点だ。that 節全体を外側の主語として捉えることで、この意味関係を正確に訳せる。

4

a. 内容節の役割と終端

- 外側での役割：主語（S）
- 内容節の範囲：文頭の That から after heavy rain まで
- 内容節の終端：after heavy rain

まず that 節の内部を確認すると、the river が主語、rises が述語動詞になっている。rise は、この文では川の水位が「上がる」という意味だ。quickly は水位の上がり方、after heavy rain は「大雨の後」という時の関係を表している。

したがって、内容節は rises の直後で終わるのではなく、after heavy rain まで続く。ここで表されているのは、「大雨の後に川の水位が急速に上がること」という内容だ。

内容節の終わりを確認すると、その直後に concerns という動詞が現れる。これが外側の主節の述語動詞（V）であり、farmers in the nearby village が目的語（O）になる。

concern は、この文では「〜を心配させる」という意味なので、何が農家の人たちを心配させているのかを考えると、that 節全体が主語（S）になっていることが分かる。

つまり、外側の文は「川の水位が上がることが、農家の人たちを心配させている」という構造だ。the river だけを外側の主語として取り出すのではなく、**that 節全体を主語として捉え、after heavy rain の後から外側の concerns へ戻る**ことが重要だ。

なお、after heavy rain は「大雨の後」という時間関係を表している。英文は、水位が上がる原因を明示的に述べているわけではないため、「大雨が原因で」と断定する必要はない。

〈That the river rises quickly after heavy rain〉 concerns
S V

〈farmers 〔in 〈the nearby village〉〕〉.
O

S “That the river rises quickly after heavy rain” / 主節の主語 / That から rain までの内容節全体が主語。大雨の後に水位が急に上がることを表す。
V “concerns” / 心配させている / concerns は外側の述語動詞。現在形で心配を表す。
O “farmers in the nearby village” / 心配している人々 / 近くの村の農家の人たち。

〈That 〈the river〉 rises quickly (after 〈heavy rain〉)〉 concerns farmers in the nearby village.
S V M M

S “the river” / 内容節の主語 / rises の主語は the river。that 節全体の外側での役割とは区別する。
V “rises” / 水位が上がる / rises は現在形。
M “quickly” / 変化の速さ / 急速に。
M “after heavy rain” / 時間関係 / 大雨の後に。原因を断定しない。内容節は rain まで続く。

b. 全文和訳

直訳 大雨の後に川の水位が急速に上がることは、近くの村の農家の人たちを心配させている。

満点の訳 近くの村の農家の人たちは、大雨の後に川の水位が急に上がることを心配している。

直訳では、that 節全体を主語、concerns を「心配させている」として、英文の構造をそのまま反映している。

満点の訳では、「農家の人たちは〜を心配している」と日本語の語順を整えているが、心配の対象となる内容と、心配している人の関係は変わらない。また、after heavy rain の「大雨の後」という時間関係も保っている。

この英文では、内容節内部の rises が川の水位の変化を表し、外側の concerns がその内容に対する農家の人たちの心配を表している。**水位が上がるという内容と、それを心配しているという主節の意味を区別する**ことで、二つの述語動詞の働きを正しく反映できる。

5

a. 内容節の役割と終端

- 外側での役割：補語（C）
- 内容節の範囲：that から the winter holidays まで
- 内容節の終端：before the winter holidays

まず外側の骨格を確認すると、Our biggest hope が主語（S）、is が動詞（V）になる。be 動詞の後ろには、主語がどのようなものか、その内容を説明する部分が続いている。

that 以下を見ると、the community center が主語、will reopen が述語動詞になっている。will reopen は「再開するだろう」という未来の内容を表し、before the winter holidays は「冬休みが始まる前に」という時期を示している。

したがって、内容節は reopen で終わらず、the winter holidays まで続く。before the winter holidays も、地域の交流施設がいつ再開するかを表す情報として、内容節に含まれている。

外側の主語 Our biggest hope は「私たちの最大の願い」を表す。その願いの具体的な内容を説明しているのが、that the community center will reopen before the winter holidays という節全体だ。このため、that 節全体が外側の補語（C）になる。

ここで the community center だけを補語と考えると、「私たちの最大の願いは地域の交流施設だ」という意味になり、再開する時期を含む願いの内容が失われてしまう。**that 節全体を C として捉え、外側の主語が表す願いの内容と結び付ける**ことが重要だ。

〈Our biggest hope〉 is
S V

〈that the community center will reopen before the winter holidays〉.
C

S “Our biggest hope” / 主節の主語 / 私たちの最大の願い。
V “is” / be 動詞 / is は願いとその具体的内容を結ぶ。
C “that the community center will reopen before the winter holidays” / 願いの具体的内容 / that から holidays までが補語。hope は願いを表し、再開の実現を保証しない。

Our biggest hope is 〈that 〈the community center〉 will reopen
S V

(before 〈the winter holidays〉)〉.
M

S “the community center” / 内容節の主語 / 再開するのは地域の交流施設。
V “will reopen” / 再開するだろう / will reopen は未来の内容。主節では願いとして述べられている。
M “before the winter holidays” / 再開の時期 / 冬休みが始まる前に。開始時点は含まない。内容節は holidays まで続く。

b. 全文和訳

直訳 私たちの最大の願いは、その地域の交流施設が冬休みの始まる前に再開することだ。

満点の訳 私たちが何よりも願っているのは、地域の交流施設が冬休みが始まる前に再開することだ。

直訳では、Our biggest hope を主語として訳し、that 節がその内容を説明する関係を保っている。満点の訳では、「私たちが何よりも願っているのは」と表現を整えているが、願っている人と願いの内容は変わらない。

©ミライコーチング

特に、before the winter holidays は「冬休みが始まる前」という時間的な境界を示している。「冬休みが始まるまでに」と訳すと開始時点を含む読みも生じるため、ここでは「始まる前に」と訳して境界を保つ。

また、主節の hope は願いを表しており、地域の交流施設の再開が確定していることを意味しない。**再開するという未来の内容が、私たちの願いとして述べられている**ことを押さえれば、主節と内容節の関係を正確に訳せる。

6

a. 内容節の役割と終端

- 外側での役割：補語（C）
- 内容節の範囲：that から three points まで
- 内容節の終端：by three points

まず外側の文を見ると、The surprising result が主語（S）、was が動詞（V）になっている。was は be 動詞の過去形であり、その後ろに驚くような結果の具体的な内容が続いている。

that 節の内部では、the smaller team が主語、won が述語動詞になっている。the final match は勝った試合を表し、by three points は「3 点差で」という勝利の点差を示している。

したがって、内容節は won や the final match で終わるのではなく、three points まで続く。勝ったという出来事だけでなく、決勝戦に 3 点差で勝ったという情報までが、結果の内容に含まれている。

外側の主語 The surprising result は「驚くような結果」を表し、that 節全体がその結果の具体的な内容を説明している。このため、that the smaller team won the final match by three points という節全体が補語（C）になる。

the smaller team だけを外側の補語として取り出すと、「驚くような結果は、より小規模なチームだった」という不自然な意味になってしまう。**補語はチームという名詞だけではなく、チームが決勝戦に 3 点差で勝ったという内容節全体**だと判断する必要がある。

〈The surprising result〉 was
S V

〈that the smaller team won the final match by three points〉.
C

S “The surprising result” / 主節の主語 / 驚くような結果。
V “was” / be 動詞の過去形 / was は結果とその具体的内容を結ぶ。
C “that the smaller team won the final match by three points” / 結果の具体的内容 / that から points までが補語。決勝戦に 3 点差で勝ったという過去の結果を表す。

The surprising result was 〈that 〈the smaller team〉 won 〈the final match〉
S V O

(by 〈three points〉)〉.
M

S “the smaller team” / 内容節の主語 / より小規模なチーム。実力や選手の身長については述べていない。
V “won” / 勝った / won は win の過去形。
O “the final match” / 勝った試合 / 決勝戦。
M “by three points” / 勝利の点差 / 3 点差で。内容節は points まで続く。

b. 全文和訳

直訳 その驚くような結果は、より小規模なチームが決勝戦に 3 点差で勝ったというものだった。

満点の訳 驚きの結果は、規模の小さいほうのチームが決勝戦で 3 点差の勝利を収めたというものだった。

どちらの訳も、that 節全体が The surprising result の具体的な内容を説明する関係を保っている。満点の訳では、won を「勝利を収めた」と表現しているが、勝ったチーム、試合、点差は変わらない。

the smaller team の smaller は、ここでは「より小規模な」という比較を表す。チームの規模が小さいことから、実力が劣っていた、勝つ見込みが低かった、選手の身長が低かったなどと推測して訳に加えることはできない。

また、won は過去形なので、内容節は決勝戦に勝ったという過去の結果を述べている。by three points はその勝利の点差であり、3 点差という情報を落とさずに訳す必要がある。

この英文では、外側の was が過去の結果とその具体的な内容を結び付けている。**外側の主語が何を指すかを確かめ、that 節全体をその内容として対応させる**ことで、補語の働きを正確に捉えられる。